

人新世の書としてジェームズ・C・スコットを読む

—自然・社会の可読化＝統治技法としてのハイモダニズム—

北野 収

1. はじめに

ジェームズ・C・スコット (James C. Scott, 1936-2024) が7月19日に亡くなった。彼は、東南アジアを専門とする政治学者・人類学者であり、長らく母校であるイエール大学の教授を務めた。スコットは、一貫して、国家権力に対するマレーシアを始めとする東南アジアの小農民、いわば「小さき民」の草の根の抵抗や土着の論理に注目してきた。20世紀を代表する批判的知性の1人である。日本との関連では、2010年に第21回福岡アジア文化賞を受賞している。

スコットの単著書のいくつかは邦訳されており、特に、1976年に発表された『モーラル・エコノミー』（高橋彰訳、勁草書房、1999年）は、開発経済学を学ぶ者にとって古典中の古典ともいえるべき必読書となっている。この他、『ゾミア：脱国家の世界史』（佐藤仁監訳、みすず書房、2013年）、『実践 日々のアナキズム：世界に抗う土着の秩序の作り方』（清水展・日下渉・中溝和弥訳、岩波書店、2017年）、『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』（立木勝訳、みすず書房、2019年）が邦訳書として出版されている。残る未邦訳の作品も、今後続々と出版される予定と聞く。

筆者は、出版を第一義的な目的としない自分のための勉強がてら、批判研究の古典の精読作業として、James C. Scott, *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*, (Yale University Press, 1998) の訳出作業を行った。訳出後にある出版社に連絡をとったところ、同書の翻訳権は既に取得済みであり、近々日本語版が刊行されることが判明した。注釈を含めるとA4版にして約400枚の筆者による訳稿は永遠に日の目を見ることはないが、本稿は、「訳者あとがき」を想定して書き綴ったメモを元に、同書（以下、『*Seeing*…』ま

たは本書）の精読作業から筆者が見出したメッセージをまとめたものである。

2. 書籍の紹介

本書は、スコットがいうところの「ハイモダニズム」と、それを統治の手法として駆使する国家（近代国民国家に止まらない）および「統治者の目線」を執拗に^{あぶ}炙り出す企てであり、徹底した歴史分析を通じたそれらへの痛烈な批判の書である。歴史を通じて、「近代知」「科学知」が「暗黙知」「臨床知」を徹底的に弾圧して、駆逐していく様子が記述される。そこには、ヨーロッパの林業と科学的林学（ドイツ）、測量と地籍図の制作、幾何学的な都市計画、姓字制度の発明、標準語の誕生（フランス）、科学と合理化を通じた福祉植民地主義、典型的なハイモダニストとしてのル・コルビジェ、ハイモダニズム都市ブラジリア、レーニンの革命思想、ハイモダニズムへの対抗者としてのローザ・ルクセンブルグとジェイン・ジェイコブズ、途上国版ハイモダニズムとしてのタンザニアのウジャマー村落計画、「自然の飼ひ馴らし」としての近代農学、メティス＝実践知（*métis*）としての土着農業技術など、東西、南北、近・現代など、時空を超越した事例分析が続く。

では、ハイモダニズムとは何か。それは、統治および管理のために、権力が社会や自然を（薄っぺらなものとして）「単純化」し「可視化」するための技法である。スコットによれば、

それは、1830年頃から第1次世界大戦まで、西ヨーロッパと北アメリカで産業化と関連して見られた、科学と技術の進歩に対する信念の強力な（あるいは筋肉質な）バージョンと考えるのが最も適切である。その中心には、科学技術知識の発展、

生産の拡大、社会秩序の合理的な設計、人間ニーズの充足、そして何よりも、自然法則に対する科学的理解に相応する自然（人間性を含む）に対する支配の拡大という、継続的で直線的な進歩に対する絶対的な自信があった（Scott 1998：89-90）。

ということになる。近代日本もそこに含まれるどころか、ハイモダニズム界の優等生だと考えるのが妥当だと筆者は考えている。ハイモダニズムは、まさに「エキューメンカル」（Scott 1998：342）な現象である。

さて、原書タイトルを直訳すると「国家のように見える」ということになるが、日本語としてピンとこない。果たして、来たる邦訳書はどのような邦題となるのであろうか。筆者が精読作業に用いたのは、2020年に印刷されたペーパーバック版だが、初版から22年を経ても、紙の本としての需要があることへの驚きと、英語圏の出版市場、知的読者層の分厚さに驚きを禁じ得ない。原書の裏表紙に掲載されている評の筆者訳を載せておく。

〔本書は〕社会科学における画期的な作品として高く評価されている。『*Seeing Like...*』は、ロシアからタンザニアに至るまで、国家が社会や環境を大規模に変えようとする際に、なぜ、しばしば、時には破滅的な失敗を犯すのかを分析し、そのような計画の失敗に共通する条件を明らかにしている。

それに続く、いくつかの評の抜粋の筆者訳も載せておこう。「この数10年間に発表された研究の中で、最も深遠で洞察に満ちた研究のひとつに違いない」（ジョン・グレイ、ニューヨーク・タイムズ書評）。「トップダウン型のプランニングに対する説得力のある批判だ」（ジェニファー・シュースラー『ニューヨーク・タイムズ』）。「見事に書かれたこの本は、今、私たちが生きている世界の本質を浮き彫りにする」（『ニューヨーカー』誌）。「人間の自由への賛歌 [...], 実に興味深い本である」（カス・サンスタイン『ザ・ニュー・リパブリック』誌）。

以上は、『*Seeing...*』が出版された1998年のものであり、2020年代に本書のコピーや評を綴るとしたら、別の言葉が必要となるだろう。当時は、冷戦終結からまだ10年も経ていないし、勃興しつつあったグローバル資本主義や新自由主義への「期待感」もあった時代だ。構造改革（調整）、規制緩和、小さな政府が時代のキーワードとなり、本書で分析されている中央集権的なプランニングとしてのハイモダニズムは時代遅れなものになった感があった。あれから四半世紀を経て、今や、政府・国家がグローバル資本の下僕となり、不可視化された統治権力が常態化するに至った。

3. 1990年代という時代性

本書はスコットにしてはめずらしく、東南アジアを舞台にした本ではない。むしろ、人類史における合理的統治とモダニティの考古学ともいうべき本である。文明、文化、技術、農林業、都市の街並み、私たちの名前、美の基準など、私たちがアプリアリと考えてきた、およそありとあらゆる概念・事象・事物の源泉が実は、統治と国家権力によって作り出されトップダウン的に与えられたものだというのが、洋の東西、近代・前近代という時代を問わず、これでもかという具合に説明される。

ただし、冷戦終結から日が浅い1990年代に書かれた本書が批判するハイモダニティは、社会主義国家における集団農場や第三世界の実験都市であったブラジリアなど、優れて20世紀的でフィジカルなもの、可視的なものに留まっている。たしかに本書のキーワードは、コロフォン・ページにあるように「中央集権型プランニングとその社会的側面」「ソーシャル・エンジニアリング」「権威主義」なのである。

筆者の専門である農業・農村開発に引き付けて述べれば、ソビエトの集団農場やタンザニアのウジャマー村が失敗した効率的な大量生産型モノカルチャー農業は、アメリカやオーストラリアなどの新大陸のみならず、開発援助や民間ベースの開発投資により、アジア、アフリカ、ラテンアメリカで大いに拡散した。その全体主義的統治の頂点に君臨するのは、国家ではなく、多国籍グローバル・アグロフード企業である。これと

は文脈は異なるが、日本の戦後農政も「選択的拡大」や「産地形成」という大義名分下での徹底したモノカルチャーであったことを忘れてはならない（北野 2024）。

実際、スコットは序章の中で以下のように述べている。彼はすべてをお見通しだったのだ。

私が批判しているような気取りや粉飾をする国家は、ほとんどの場合、消滅したか、その野心を大幅に抑制した。しかし、科学的農業、工業的農業、資本主義的市場一般を検証して明らかにしたように、大規模資本主義は、国家と同様に、均質化、均一化、グリッド〔化〕、英雄的単純化のエージェンシーである。市場は必然的に、価格メカニズムによって質を量に還元し、標準化を促進する。市場では、人間ではなく金がものを言う。今日、グローバル資本主義は、おそらく均質化のための最も強力な力であり、一方、国家は場合によっては、地域の差異と多様性の擁護者であるかもしれない。[…] 後述するように、近代的な社会工学的プロジェクトの失敗から導き出される結論は、市場主導型国家にも当てはまるのだ（Scott 1998：8）。

4. 権力の不可視化：21世紀のスーパー・ハイモダニズム

前世紀を遠い過去として感じるようになった21世紀を生きる私たちが、19～20世紀の統治の政治に学び、改めて「近代＝モダニティ」の意味を問い直すことは重要である。ハイモダニズムは姿を変えて、あるいはそのままの姿で依然として健在である。この四半世紀の間、新自由主義の嵐が吹き荒れ、同時進行でデジタル革命を経験した。今や、ネット情報、広告の操作が常態化し、監視社会の貫徹、アルゴリズムや遺伝子操作を通じた見えない統治手法を具備した「スーパー・ハイモダニズム」「見えない全体主義」の出現をみたのである。

スコット自身、一貫して、国家統治の正統性への疑義とアナキズム的な世界観の美学を著し続けてきた。

出版当時、国家社会主義や全体主義批判の書として本書を読んだ人も少なくなかっただろう。この本を書いていた1990年代当時のあの空気が本書の構成やテキストに反映されていないといったら嘘になるかもしれない（特に、レーニン批判の章は、「いまさら」感もあった¹⁾）。本書におけるスコットの結論「いかにして失敗したのか」を、その後の20余年の間に発展した「スーパー・ハイモダニズム」にそのままあてはめる訳にはいかない。だが、考えてみて欲しい。失敗どころか、21世紀に入り、統治への欲望は姿を変えて、さらに高度化したのである。

だから、今読み直してみると、出版当時のあの読み方はある意味「誤読」だったかもしれない。スコット自身も想定しなかった「読み方」が存在する可能性があるのだ。折しも、不可視化された現代のモダニズムは、人々の飼い馴らしを歴史上前例のない巧妙さで着実に推し進めているかの如く映る。現代のスーパー・ハイモダニズムによる統治は、デジタル情報やバーチャルな映像をフルに動員したものに進化した。今や、国家がグローバル資本の下請け装置あるいはエージェントとして組み込まれたのである。「資本＝国家連合」によるアフリカ、アジア、ラテンアメリカの農村における剥き出しの土地収奪・採掘主義はより先鋭化し（サッセン 2017）、「新たな全体主義」の様相を呈している。目に見える権威主義よりも、目に見えない権威主義の方がはるかに巧妙なのだ。

いずれにせよ、統治への動機とその手法は時代とともに変わりつつも、国家にせよ、資本にせよ、両者の共謀にせよ、統治主体が何であれ、国家社会主義であれ、新自由主義であれ、体制がどうであろうと、全体主義的な監視と統治＝飼い馴らしはエスカレートするばかりである。この統治への欲望がモダンなものと不可分であるとしたら、ポストモダンなどは夢のまた夢である。より巧妙になった現代の不可視的統治のメカニズムを理解するにあたって、今となっては牧歌的とすらいえる前世紀の「統治のための可視化・画一化のメカニズム」を知ることは前提条件であろう。例えば、第6章のソビエトのハイモダニズムにみる資本主義への憧憬とアメリカ側の合理化へのあくなき欲求という

視点は、「さすがスコット！」というべきものである。

本書の分析は時代遅れなものというよりも、むしろ、超近代的な統治の技術・手法を批判的に考える上での基礎を提供する。

5. 日本のハイモダニズムを考えるための視角

さらに本書は、日本における「二度のモダニティ」、すなわち、明治期の近代化と戦後のアメリカの影響下での近代化を再考²⁾するための有用な参照項となり得る。相対論として分散型・分権型システムであった幕藩体制が突然変異のごとく一転して、ハイモダニズムに席卷されたのはなぜか。そのエネルギーはどこから湧いて出たのだろうか。世界史的に考えた場合、極東の島になぜあのようなハイモダニスト国家が（植民地化も、社会主義革命も経ずして）突如登場したのだろうか。戸籍、姓名、地籍、イエ制度、「標準語」化（方言や地方言語の徹底的な軽視）、世界に類をみない徹底した国民統合化を鑑みれば、『*Seeing...*』がとりあげた事例などは「生ぬるい」と感じるくらいである。そして、私たちが習う歴史においては、日本はこれらハイモダニズムによって成功したというナラティブが語られているのである。

日本における20世紀的ハイモダニズムの顕著かつ知られざる例は、国による戦後の拡大造林計画であろう（『*Seeing...*』にも、日本の林業への言及あり）。私たちは、元々広葉樹林だった日本列島の森林を産業用途のためにモノカルチャーの針葉樹林に変えてしまった（スコットの表現では「木材農場」）。その代償は、国有林野事業の赤字だけでなく、保水力の低下（洪水や崖崩れの原因）、餌場を失った鳥獣による害の増加、花粉症の「国民病」化など、途方もないものである。生活と切り離された林業や「山」は荒れるばかりであるし、その維持には莫大な労力と費用がかかる³⁾。

他方で、現代日本においても、20世紀的なハイモダニズムは、五輪、万博、カジノ、リニア新幹線⁴⁾、東京都小平市の玉川上水の雑木林の伐採（國分 2013）など枚挙にいとまがない。それらの動機は、統治なのか、利権なのか、あるいは両方なのだろうか。この本で取り上げられている諸事例（森林のモノカルチャー

化、姓名、方言・地方言語の軽視と国語化など）をみるにつけ、それらはあたかも日本の近代化の説明を読むがごとしとも映るではないか。

『*Seeing...*』の議論のうち次の2点をここで再度確認しておきたい。第1は、スコットは本書の中で「伝統」という言葉を注意深く避けてきた（Scott 1998 : 331）ことに関することである。いわゆる「日本の伝統的な家族（観）」がイエ・苗字・戸籍という明治期に創設または適用範囲が拡大された諸制度に立脚していることは間違いない。本書を読めばこれは古来の伝統ではなく、国民管理というすぐれて近代国家的な要請から生まれたハイモダニズムそのものであることに気付くだろう。歴史家の安丸良夫によれば、かつて人口の大宗を占めた武士階級以外の人々には姓制度は原則存在しなかったし、自由結婚も一般的であったという（平田周・岩崎稔・三宅芳夫 2016 : 140）。進歩という名の下に庶民も「武士並みに」扱う一方で、世界に類を見ない国民管理の仕組みが創設された訳である。内発的發展論を唱えた社会学者の鶴見和子は次のように述べる。

日本の近代化とは、非常にはしょって言えば、一億サムライ化であったといえることができます。江戸時代には、武士は本当にひと握りで、90パーセントの人たちは武士以外、多くは農民、漁民、工人、商人という人たちだったわけです。それから未開放部落その他の差別された人たちがいました。そういう人たちはやはりそれぞれ文化を持っていたのです。[...]ところが、明治の近代化によってすべてを統一する。そしてみんな格上げされて武士という階級が制度としてなくなったとたんは一億がサムライになった。これが日本の近代化のパラドックスです。一億総サムライ化による近代化が成功したことがまた私たちのパラドックスを作り出したといえることができます。[...]サムライ・エリートが指導者となって、サムライの伝統と西欧近代のモデルとを接合して、中央集権型近代化のルールが敷かれたというふうに見ることができます（鶴見 1998 : 338-339）。

これはほんの一例に過ぎない。「伝統」の装いを纏ったハイモダニズムは、スコットがいう進歩主義と実は同義である。

第2は、ハイモダニズム的進歩主義には少なくとも右派・左派という党派性は無関係であるということだ。20世紀の国家社会主義のハイモダニズムは可視性が高く解りやすい。他方で、自由主義、民主主義の顔ををしたハイモダニズムもしっかりと根付いてきた。そう、「進歩主義」は左派の専売特許でないのだ。そして、21世紀のスーパー・ハイモダニズムは可視性が低く、フーコー的な生権力論との親和性が高い。

では何故、失敗に失敗を重ねてもハイモダニズムはスーパー雑草のごとく、地球の各地で、この日本で、次々とアップデートされ、増殖するのか。これについては、筆者は少なくとも2つの要因があると考えている。第1は、国家目線、資本目線が（とりわけ日本に住む）人々の間で内面化、身体化されているということだ。これは現代の「見えない植民地化」であり、飼ひ馴らしでもある。第2は、そもそも、次々と繰り出される「ハイモダニズム事業」は、それに従事するプランナーたちのナイーブな個人的動機とは裏腹に、現実には、人間厚生改善でも、社会改良ですらもなかったということだ。動機は統治と利潤への飽くなき欲求に尽きる。私たちが意識すべき構図は左右対立ではなく、上下間の植民地的支配（上からのモダニティに土着・ローカルな原理が絡めとられていくこと）なのだ。

しかしスコット曰く、「ハイモダニズムを科学的実践と混同してはならない。「イデオロギー」という言葉が意味するように、それは基本的に科学と技術の正当性を借りた信仰」（Scott 1998：4）なのである。

6. 人新世の書として：自然と社会の脱植民地化のために

筆者は、2022年に、ラテンアメリカを代表する批判的知性である南米コロンビア出身の人類学者アルトゥーロ・エスコバルが著した批判開発学の古典、『開発との遭遇：第三世界の発明と解体』（原書1995年、増補版2012年）を翻訳出版した。その中で分析されてい

た冷戦期に生まれた「開発＝近代化」という統治手法、背後にあった欲求には、本書につながる部分も大きい。かくして筆者の中に、いつかスコットの『Seeing…』を精読したいという欲求が生まれたのである。スコットとエスコバルのこの2冊を精読すると、次のような問題設定に導かれるに違いない。あるいは、この21世紀に、これからスコットのこの本の邦訳書を手取る方々への提案として受け取っていただいても構わない。

ハイモダニズムは私たちや自然の可読性を高めようとあらゆる努力を惜しまない一方で、近年のスーパー・ハイモダニズムは権力の不可視化を進めてきた。しかし、その「暴力性」「全体主義性」「植民地主義性」は不変かつ普遍的であり、「エキュメニカル」でもある。これに抗うには、デコロニアル＝脱植民地主義化というキーワードが意味を持ち得ると、エスコバル訳者として、また自身のメキシコの内発的発展運動の研究（北野 2019）を経た者として思うのである。

「ブルーリバーズ＝多元世界」という概念を世界に発信したのは1994年にメキシコのチアパス州で武装蜂起したサパティスタ民族解放軍（EZLN）であると言われる。彼らはテロリスト集団ではない。その多くは先住民族の農民である。それは、グローバル化、すなわち「一つの世界」の形成を推進する新自由主義と当時の北米自由貿易協定（NAFTA）によって、先住諸民族が継承してきた宇宙観が完全否定されることに対する「最終手段」としての蜂起であった。なぜなら、西洋近代・近代日本的二元論⁵⁾的存在論ではなく、ノンヒューマンも含めたありとあらゆるものは関係性の中にのみ存在し、「自然≡テリトリオ（領域）≡共同体・コムニダ≡家族およびその構成員」という宇宙観の中で生きてきた人々にとって、経済的利益と利便性、そして（事実上全人格的に）統治されることを所与とするような生き方、自分たちの存在のあり方は、到底受け入れ可能なものではなかった⁶⁾。

はたして、ラテンアメリカの先住民たちは、特殊な人々なのだろうか。西洋近代・国民国家・資本主義に染まる以前の世界（西洋、日本を含む）には、地域差や文化による濃淡はあっても、利潤や合理性のみを唯一の価値とはしない多様な生活が存在していたことを

考えれば、先住民が特殊な例外だとは言いきれないだろう。

ここで、「人新世 (Anthropocene)」という視角が必要となる。もはや言うまでもなく、人新世とは地球の地質年代の直近の時代のことである。かつては地球の環境変化に合わせてヒトを含めた生物・生命体が発達してきた訳だが、現在は地球の環境の変化が人間の活動によって引き起こされている。要は、親（地球）と子（人間）の立場が逆転して、子が親を変えてしまう時代になった⁷⁾。このようなプラネタリーな問題設定が重要になっている。考えてみて欲しい。国際関係・外交は国家と国家の関係、文化相対主義や多文化主義は人々と人々との関係、経済発展は人間の経済活動の増加、持続可能な開発は資源の有限性に配慮した経済発展であり、共通するのは人間至上主義 (anthropocentrism) なのである。そこでは常に、自然や環境は主体としての人間からみた客体として認識されている。近代のまなざしを常に正解とすることが、ある種のコロニアリズム的状况だとすれば、地球上の物体や生命体の一つに過ぎなかった人間からの視点を（まるで神の意志の如く）唯一の視点とする態度もまた、コロニアリズム的状况だと言わねばならない⁸⁾。

話をスコットに戻したい。スコットの国家による統治権力批判は、人間界における権力関係分析に止まらず、人間中心的なプランニングへの疑義、さらには、自然と人間との間にある権力関係について思考することをも、21世紀を生きる私たちに要求している。

7. おわりに

筆者はスコットとは異なり、東南アジアに関する知見はほとんど有していない。それでも、本書の内容の多くが筆者の専門である農業・農村開発や広義の農学・林学に関するものであったこと、また、かつての留学先の授業で、『*Seeing...*』の第4章が取り上げた計画都市ブラジリアの人類学的分析の本 (Holston 1989) を読んだことが、精読する上で大いに役立った。

統治権力批判といっても、スコット (『*Seeing...*』以外を含む) とエスコバル (『*開発との遭遇*』以外を含む) の視角と方法論は異なる。両者とも「小さき

民」の草の根の抵抗を評価するが、エスコバルは、モダニティ言説がやがて統治システムという実態を構築すること、途上国の近代国家はそのシステムの下部機構として作動するようになることを「開発」として批判する。その時間軸はもっぱら戦後、対象地域はコロンビアを中心とするラテンアメリカに絞られている⁹⁾。他方、スコットは国家や権力の構築性というよりは、それらを所与とした上での統治の技法の諸類型を記述している¹⁰⁾。時代の範囲は17世紀頃から現代 (1960年代) まで、地理的対象も西欧、東欧・ロシア、アフリカ、南米、アジアなどに及ぶ。

現代の知識人である以前にアブヤ・ヤラ¹¹⁾ 人であるエスコバルの開発批判と、非欧米圏に対するとてつもなく深い造詣を有しつつもアメリカ人であるスコットのハイモダニズム批判とでは、モダニティとの距離感や温度差が違うのは当然のことかもしれない¹²⁾。他方、両者に共通するのは、権力 (国家、資本、開発機関) が一般の農民や民衆、すなわち「小さな民」 (村井 2023) は愚かで無能だと仮定し、彼らの暗黙知や経験知をまったくもって信頼しないことを批判し、それを根底から覆そうとする姿勢である。この問題に対するフォローアップ的な仕事としてのアナキズム論 (スコット)、「ブルーリバーズ＝多元世界」論 (エスコバル) もまた、両者の違いの延長線上にある。

いずれにせよ、筆者にとって、1990年代に著されたこの2冊の「古典」を精読 (翻訳) したことは、今後の研究の枠組みを考える上で、この上ない糧となったことは言うまでもない。

出版後1～2年で絶版になる専門書が多い中、いかに時代や世界情勢が変わろうと読み継がれていく古典が存在する。スコットにせよ、エスコバルにせよ、このような「古典」をそれぞれ複数冊、世に問うてきた。残念ながら、私たちはスコットの新作を読むことはできなくなった。だが、これから出て来るスコットの邦訳書たちを手にとることを楽しみにしようではないか¹³⁾。

注

- 1) レーニンの再評価に関する書として、白井（2021, 2024）をあげておく。
- 2) 北野（2022）を参照されたい。
- 3) スコットも第1章の原注27で「日本のスギ林は人災である」と指摘している。
- 4) 運賃や時間の面で飛行機や高速バスに対抗できず、新幹線がもたらすストロー現象（通過地点になることによる不便益の増大とローカルな交通の寸断による不利益）のデメリットという地理学上の教訓も生かされていない。
- 5) 西洋vs非西洋，進んだ者vs遅れたもの，都会vs田舎，男性vsそれ以外，人間vs自然，男性原理・家父長主義・父権制vs女性原理・母権制，科学知・近代知vs暗黙知・経験知，日本人vsそれ以外のアジア人など。
- 6) このパラグラフはEscobar（2020）, Esteva（2022）を参考にしている。
- 7) 獨協大学交流文化学科ウェブサイト2024/5/7「バラが咲きました（北野収）」：<https://dotts.dokkyo.ac.jp/2024/05/07/%e3%83%90%e3%83%a9%e3%81%8c%e5%92%b2%e3%81%8d%e3%81%be%e3%81%97%e3%81%9f%ef%bc%88%e5%8c%97%e9%87%8e%e5%8f%8e%ef%bc%89/>（2024年11月9日閲覧）
- 8) 獨協大学交流文化学科ウェブサイト2022/6/30「教員新刊 北野収・西川芳昭編『人新世の開発原論・農学原論』」：<https://dotts.dokkyo.ac.jp/2022/06/30/%e3%80%90%e6%95%99%e5%93%a1%e6%96%b0%e5%88%8a%e3%80%91%e5%8d%92%e6%a5%ad%e7%94%9f%e3%81%a8%e3%81%ae%e5%85%b1%e8%91%97%e6%9b%b8%e3%81%8c%e5%87%ba%e7%89%88%e3%81%95%e3%82%8c%e3%81%be%e3%81%97%e3%81%9f/>（2024年11月9日閲覧）
- 9) ただし，その後のエスコバルの著作は，先住民の宇宙観の時間軸に重きをおいている。
- 10) スコットは本書の次にもう1つの大著である「統治されない技法（Art of not Governed）」（邦訳：『ゾミア：脱国家の世界史』）を著した。エスコバルは，その後，「小さき民」たちの多様な宇宙観，精神性に基づいたデザイン戦略として『多元世界に向けたデザイン』（エスコバル 2024）を著した。
- 11) パナマ〜コロンビアの地域のこと。「活き活きとした血の大地」を意味するクナ語。
- 12) スコット『*Seeing...*』は，統治の仕組み，とりわけ国家（前近代国家を含む）が自然や社会を含むあらゆるものを統治するようになった現象をハイモダニズムへの信仰の考古学として批判した。エスコバル『開発との遭遇』は，近代化＝開発が自然や人々を事実上植民地化していく様を詳細な開発の民族誌として著した。
- 13) エスコバルの邦訳書も複数予定されている。

引用文献

- エスコバル，アルトゥーロ，北野収訳『開発との遭遇：第三世界の発明と解体』新評論，2022年。
- エスコバル，アルトゥーロ，水野大二郎ほか監訳『多元世界に向けたデザイン』ビー・エヌ・エヌ，2024年。
- 北野収『南部メキシコの内発的発展とNGO 補訂版』勁草書房，2019年。
- 北野収「訳者解題 ポスト開発の先にある多元世界の展望：飼い馴らされた羊は変革主体に変身するか」アルトゥーロ・エスコバル『開発との遭遇：第三世界の発明と解体』新評論，2022年，441-493頁。
- 北野収「食・農・地域の再民主化：日本でシビック・アグリカルチャーは可能か？」『計画行政』47(3)，2024年，27-32頁。
- 國分功一郎『来るべき民主主義：小平市都道328号線と近代政治哲学の諸問題』幻冬舎新書，2013年。
- サッセン，サスキア，伊藤茂訳『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理：不可視化されゆく人々と空間』明石書店，2017年。
- ジェームズ，スコット・C，高橋彰訳『モーラル・エコノミー』勁草書房，1999年。
- ジェームズ，スコット・C，佐藤仁監訳『ゾミア：脱国家の世界史』みすず書房，2013年。
- ジェームズ，スコット・C，清水展・日下渉・中溝和弥訳『実践 日々のアナキズム：世界に抗う土着の

秩序の作り方』岩波書店, 2017年。

ジェームズ, スコット・C, 立木勝訳『反穀物の人類史：国家誕生のディープヒストリー』みすず書房, 2019年。

白井聡『未完のレーニン』講談社学術文庫, 2021年。

白井聡『「物質」の蜂起をめざして：レーニン, 〈力〉の思想』ちくま学芸文庫, 2024年。

鶴見和子『コレクション鶴見和子曼荼羅Ⅵ：水俣・アニミズム・エコロジー』藤原書店, 1998年。

平田周・岩崎稔・三宅芳夫「近代の総体を支える視線——安丸良夫と現代思想 [対談]」『思想』九月臨時増刊号, 2016年。

村井吉敬『小さな民からの発想：顔のない豊かさを問う』めこん, 2023年。

Escobar, Arturo. *Pluriversal Politics: The Real and the Possible*. Duke University Press. 2020. (北野訳, 近刊予定)

Esteva, Gustavo. *Gustavo Esteva: A Critique of Development and Other Essays*. Routledge. 2022. (北野訳, 近刊予定)

Holston, James. *The Modernist City: An Anthropological Critique of Brasilia*. University of Chicago Press. 1989.

Scott, James C. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. Yale University Press. 1998.

**Reading a James C. Scott book as a book of the Anthropocene:
High Modernism — An Art of Domination with the Legibility of Nature and Societies**

KITANO, Shu

James C. Scott (1936-2024) was an American political scientist and anthropologist who specialized in peasant politics in Southeast Asia, particularly Malaysia. His 1998 book, *Seeing Like a State*, is one of the classics in its field, and provides us with many implications for thinking about the dominant power of states over nature and human societies, regardless of the time in which the book was written. In this paper, based on an extensive close reading, I propose to read the book as a book of the Anthropocene. Because its discussion and analysis of the high modernism of the 19th and 20th centuries as an art of domination with the legibility of nature and societies still provides the essential for understanding the power of domination in the age of “super high modernism” with neoliberalism and digital technologies. I present my discussion comparing two critical intellectual giants, Scott and Arturo Escobar, in the last part of this paper.

